

二宮史学における文体と比喻

岸本 美緒

目次

1. 史学史研究の対象としての文体と比喻
2. 文体
3. 比喻

はじめに

長谷川さん、成田さんをはじめとしてこの場にいらっしゃる皆様と比べて、私は実は二宮先生と直接にお話した機会はそれほど多くないのです。もちろん、ご著作からは非常に影響を受けたと思いますけれども。二宮先生とご一緒した機会としては、日本西洋史学会のシンポジウムですとか、あと岩波書店で二宮先生をはじめ歴史研究者を何人か呼んで、現在の歴史学の課題を聞きたいということで懇談会を設定してくださったことが何度ありました。東洋史も一人まぜようということで、私も呼んでくださったのだと思いますが、二宮先生を中心として、皆さんのお話が談論風発という感じで、それはもう非常に面白い。それでときどき、「東洋史はどうですか？」と話を振ってくださるのですが、こちらは頭の中がまとまっていないものですから、アーとかウーとかいうばかりで、ほとんど答えられない。二宮先生たちから見ると、ほとんどしゃべらずにおいしいお料理をひたすらばくばく食べているお気楽な奴、と思われると思いますが、内心は打ちのめされておりました。せっかく聞いてくださったのに、そのとき答えられなかったことは、今思い返しても恥ずかしい痛恨事であります。ここではそのおわびを兼ねまして、二宮先生のご著作に関して私の感ずるところを率直にお話したいと思います。むろん私は、フランス史の専門ではありませんし、歴史学方法論についてもあまり考えたことはありません。従ってきちんとしたお話はできませんので、ここでは、二宮先生のご著作から私が受ける漠然とした

「感じ」、この「感じ」の正体は何なのか、ということ、二、三の事例に即して、素人なりに考えてみたいと思います。

ここでいう「感じ」の内容には、研究対象について著者が描き、読者が感ずるイメージというのみならず、文体・語り口を通じて著者と読者との間に作り上げられてくる関係や著者の自己イメージといったものも含みます。ですので、例えば私がここで「二宮先生」と言うか或いは「二宮さん」と言うか、といったことも議論にちょっと関係してくるわけです。そこで、どう呼びするかなかなか難しいのですが、とりあえず以下では少し距離をとって、「二宮氏」というふうにお呼びしたいと思っております。

1. 史学史研究の対象としての文体と比喻

さて以下、二宮氏の歴史学の醸し出す「感じ」について考えてみたいと思うのですが、このような「感じ」というものを考えてみる意味はいったいどこにあるのでしょうか。私は実は、こうした「感じ」を史学史的に対象化することは、案外重要なことではないかと思っております。一般に史学史的な研究において扱われるものは、概念的に整理された史学史上の語彙群であろうかと思えます。例えば、「史的唯物論」「戦後歴史学」「社会史」「民衆史」「全体史」「世界システム論」「表象の歴史学」「グローバル・ヒストリー」……といった類のものです。ただ、私たち読者が歴史学の作品を読んで直接に受け取るものは何なのか、ということを考えてみますと、議論や実証の内容ばかりでなく、文体や比喻的なイメージのもたらす、「ピンとくる」とか、「しっくりする」とか、「なんとなく惹かれる」といった漠然とした感じが案外大きな部分を占めているのではないかと。例えば何十年

か前の歴史学の本を読んで私たちが時代性を感じるのは、実証や議論の内容が古いというばかりでなく、一種の「書きっぷり」、即ち文体や比喻から匂いたつその時代の雰囲気には驚くのではないでしょうか。歴史学におけるこのような文体や比喻の問題に関して、例えば『歴史の文体』(P. Gay)、『歴史のメタファー』(R. Nisbet)などの著作はありますが、少なくとも現在の日本では、これらの問題が史学史のなかで市民権をもっているとは必ずしも言えないのではないかと感じられます。

「歴史の物語り論」は本来そういう側面を対象化するはずのものだったと思うのですが、私見では、「物語りである」という結論が先行し、かつ「物語り」論者が認識論的に素朴な歴史家を批判的に俎上に載せるという構図が表に出すぎていて、実際の歴史家の文体などをじっくりと粘着的に分析した研究はあまりないように思われます。「物語り」論者自身についてみても、彼らも何かを「物語って」いるのだと思われるのですが、自分がどのような自己イメージを持ち、読者との距離感をどのように測り、どのような文体で論じているのか、という点に着目した自己分析的な著述はほとんどないのではないのでしょうか。

二宮氏は、「物語り論」とは一線を画しておられました。歴史叙述の実作者であるだけに、ある意味では「物語り」論者以上に、ご自分の「語り」に対して鋭い意識をもっておられたのではないかと推察されます。「平易かつ明澄」「清澄で明晰な語り」と評される二宮氏の文体——これは、二宮氏個人のものではありませんが、当時の学界で支配的な文体を批判的に意識しつつ自覚的に拒びとられたものであると考えるならば、それを「史学史的」に論ずることもできるのではないかと思います。

二宮史学において「感覚」「雰囲気」に重要な位置づけがなされていることは疑いないことですが、それは、対象となる時代の「感覚」や「雰囲気」を歴史家が理解するという事に止まらず、現在

の著者と読者との間の「感覚」「雰囲気」の共有(或いはズレ)の問題にも広がってゆくはずで、「書き手と読み手の心の通い」(5-351。以下、括弧内の数字は『二宮宏之著作集』の巻数と頁数を指す)。「頭でっかち」でなく「からだ」と「こころ」のレベルで「通う」とはどういうことか。そこに、感覚に訴える文体や比喻の役割があるのではないのでしょうか。

この報告のタイトルに「二宮史学」という言葉を使いましたが、「二宮史学」というような呼び方はあまりにも二宮氏を奉っているようで、二宮氏自身あまり喜ばれないのではないかというお考えもありましょう。でもなんとなく「二宮史学」と言いたくなってしまうのは、二宮氏の著作に、読者をひきつけるある特有の「雰囲気」があるからではないか、そしてそこに、二宮氏の好みと結びついた一貫したものが見て取れるからではないか、と思います。

2. 文体

それではまず、二宮氏の著作において、歴史家の「文体」というものが、どのように言及されているかを見てみましょう。事例はそれほど多くないのですが、興味深い内容が見られます。スタイリストという言葉の本来の意味は、「文体に意識的である人」という意味だそうですが、そのような意味では、二宮氏は日本の歴史学界で有数のスタイリストであったといえるでしょう。

・ムーヴレ先生が空疎な美文調の饒舌を嫌悪され、極度に凝縮され、一字たりとも動かしえない程の緊迫したクラシックな文体でその論文を書かれたのも、この精神(峻厳な批判精神)のなせる業である(「ジャン・ムーヴレ先生追悼」1972、5-297。引用文の括弧内は引用者による補足。以下同様)。

・高橋(幸八郎)さんの文体は、大塚(久雄)さんとは随分違った文体で、あの二人の資質の違いを良く表わしていると思いますが、僕は高橋さんの文体にとっても惹かれてきてね。これは今でもそ

うなんです、『近代社会成立史論』は大好きな本でした(「インタビュー 二宮宏之氏にきく」1992、5-401)。

・フェーヴルの文章は、頭の回転が速く、物事に熱中し、そそっかしいところのある人柄をみごとに表現している。本書(『歴史のための闘い』)に収録されているのは、……それぞれに肩肘張っていてもおかしくないものなのだが、フェーヴルの語り口は自由闊達で屈託がない。時には羽目を外しすぎているのではないかと思わせるほどだ。……マルク・ブロックは、この点ではフェーヴルと対照的であった。ブロックがいつも上下を着けていたというのでは勿論ないが、その凝縮された文章は論理明晰、何ひとつ無駄なものはない(「現代歴史学生誕のドラマ」1995、5-3)。

・教科書の歴史記述の文体自体は、歴史というものはこういう読みとり方があるのだという文体ではなしに、これが世界史である、これが日本史であるという文体で書かれている。……教科書型の記述というものが、どうしても歴史を一つの型にはめて、外側から押しつけるといいますか、他律的な歴史像というものを若者に与えてしまっているのではないのでしょうか(「歴史への問い」1995、1-299)。

・彼(ブローデル)の文体は一種パセティックなんです。やや美文調にすぎる感もありますが、この文体と非常にマッチした想いが、『地中海』という作品のなかにはこめられているように思います(『地中海』と歴史学」1996、1-208)。

このような評言をまとめてみますと、二宮氏には、固く生氣のない文体——日本の歴史教科書のみならず、多くの実証論文に共通する——に対する拒否感があつたことは疑いないところでしょう。一方で、パセティックな美文や饒舌な才気の誇示に対するクールなまなざしも、大変特徴的だと思います。必ずしも「嫌い」というわけではないけれども、自分ではちょっと遠慮する、というような……。そして一貫して見られるのは、無駄のな

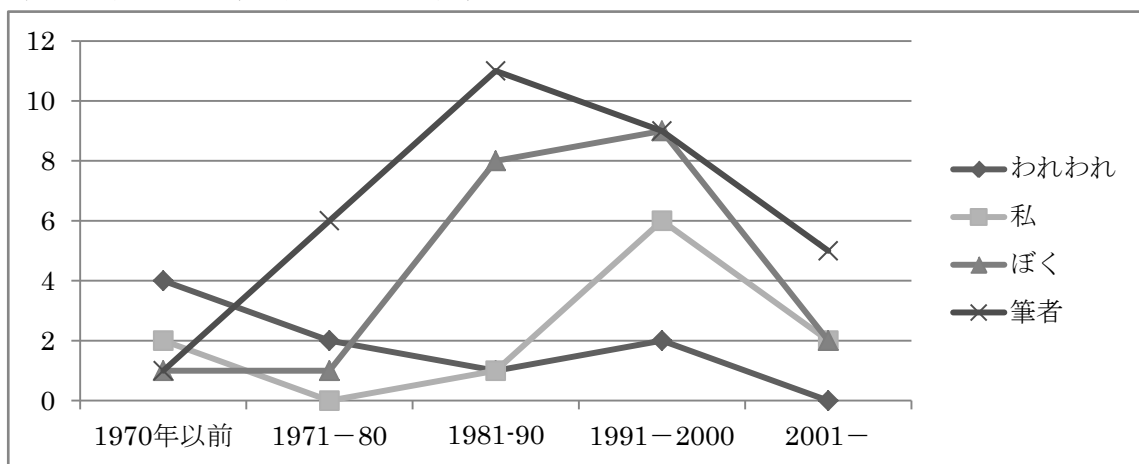
い明晰な文章に対する尊重であります。

興味深いのは、高橋幸八郎氏の文体についての評価です。実のところ、高橋氏の『近代社会成立史論』と二宮氏の文体を比べてみると、どうしても似ているとは思えないのです。高橋氏の文体のもつ熱気と衝迫力、そしてそれに伴う一種の「押しの強さ」。それに対して、二宮氏の文体は暖かきはあるけれども、「押しが強い」という感じは全然しません。それにもかかわらず、二宮氏は高橋氏の文章に「とても惹かれた」、「大好き」とおっしゃる。そこには、戦後歴史学に対する二宮氏の、決して単純ではない感懐があるのかと思われますが、その点は私の能力を以てしては論ずることはできません。西洋史の方々のお考えを伺いたいところです。

以上、二宮氏の生き生きした、しかも脇の甘さや筆のすべりのない文章は、自然に流れ出た、というよりはむしろ、意識して細やかな配慮のもとで選びとられたものであるように思われます。フランスの歴史家たちについて二宮氏は、敬愛の念に満ちた評伝や紹介を書かれているのですが、情緒的な同一化に対してはしっかりとブレーキがかかっているという感じを私は常に受けていました。心を通わせつつもよりかからない、その緊張感に二宮氏の文体の一つの特徴があるように思うのですが、いかがでしょうか。

さて次に、若干唐突ではありますが、二宮氏の使用する一人称について、分析してみたいと思います。二宮氏はときどき「ぼく」という一人称を使用しておられましたが、私はこのインティメートな語感をもつ自称にずっと関心を抱いておりました。とりあえず、『二宮宏之著作集』に出てくる自称を時期別のグラフにしてみたものをご覧ください。

表 二宮氏の文章で用いられる自称



(注1) 各数値はそれぞれ関連の複数形や別表記を含む。われわれ←われわれ、我々／私←私、私たち、わたし、わたしたち／ぼく←ぼく、ぼくら、僕、僕ら／筆者←筆者

(注2) 『著作集』所収の各文章につき、用いられている一人称を原則として一つ挙げた（同じ文章に同じ一人称が複数出てくる場合は1と数える）。ただ、同じ文章に異なる一人称が共存している場合（「筆者」と「私」など）は、それぞれ1とした。

(注3) インタビューは除いた。

なぜこのようなどうでもよいことに関心をもつのか、不審に思われるかもしれませんが、自称というものは、単に著者を指示するという機能のみならず、著者と読者の距離感覚を反映する言葉といえます。ほとんどの研究者はあまり意識せず自称を用いていると思われるが、多くの例を集めてみることによって、それぞれの時期の特徴とともにそれぞれの研究者の特徴も浮かび上がってくるのではないのでしょうか。

二宮氏の場合注目されることは、氏の用いる自称の多様さです。私（岸本）は数十年来もっぱら「私」を使っておりますが、二宮氏の場合、「私」が比較的少ない。時期的に見ると、初期には「われわれ」が多く、その後「筆者」と「ぼく」が多くなる、という興味深い推移を示しています。エッセイと論文で使い分けという傾向はむしろありますが、必ずしも明確には分かれていません。

初期の「われわれ」について見ますと、「われわれ」という自称は、戦後の歴史学において想定されていた著者と読者との関係を特徴的に表す語ではないかと思われます。この場合、「われわれ」と

いう語の機能は、必ずしも一人称の複数を指すというだけではなく、著者と読者との間の強い関係を表しています。例えば、「次にこの問題を検討する」という意味のことを、「われわれは次に、この問題を検討せねばならない」と言ったりするわけです。二宮氏の例でいえば、「ところでわれわれは、以上のラヴォーの立論の上に立って、更に、それぞれの社会層の発展方向を見定めておかねばならない」（『領主制の『危機』と半封建的土地所有の形成』1960、4-110。傍点原文）というふうにです。そこには、論理的な話の進め方はこういうものだ、という、気負いともいえるようなトーンの高さがあります。必ずしも実践的な呼びかけの部分に限らず、論文全体に当為の感覚が横溢しているのです。或いはそこには、欧文論文における著者自称の用い方が影響を与えているのかもしれませんが、そうした一種の欧文直訳的な調子も含めて、このような「われわれ」の用い方には、著者の読者との間の「同志」的な関係とともにまた、読者に同調を促すやや権威的な暑苦しさも含まれているように思います。

一方で、「ぼく」という自称の増加は 1980 年代から見られます。それは『社会史研究』に連載されていた「不協和音」というエッセイのなかで、二宮氏がもっぱら「ぼく」を使っていたこととも関係するでしょう。しかし、「ぼく」という語がすでに、極初期の文章にも見られることにも留意すべきです（「十六世紀の歴史像」1956、4-211）。戦後の歴史学において「ぼく」という語は、自然にというよりはやはり、一定の意味をもって意識的に使われていたと思われます。その代表例というべきは、内田義彦氏の『経済学の生誕』（未来社、初版 1953）でしょう。「ぼく」という自称を一貫して用いたこの書物で内田氏は、その理由を明示的に説明してはいませんが、「あとがき」で、経済学における「人間」の不在について批判的に触れており、「ぼく」という自称を氏がなぜ選んだのかを窺うことができます。このような問題関心は、二宮氏に近いものがあるといえるのではないのでしょうか。

同時に二宮氏は、三人称的自称である「筆者」も多用します。「筆者」という語は、クールでアカデミックな語感をもち、「ぼく」とは対極の肌触りの言葉です。しかし、1980 年代から 90 年代、氏が健筆を振るわれていた時期に、「筆者」と「ぼく」とはともに多数を占めるのです。その理由を推測することは難しいですが、二宮氏の文体に見える、親密さとクールさとが緊張感をもって拮抗しているような感じが、ここにも見て取れるのかもしれませんが。

なお、『二宮宏之著作集』を題材に自称法の「調査」を行って感じたことは、日本語というのは、特に論文の場合は、自称なしでも十分に使える言語だということです。問いの立て方も、「私」が立てるのではなく、自動的に立ってくるような形で書くことが可能です。そのようななかで「私」というものをどのように論文のなかに位置づけるべきでしょうか。加藤博氏の『アブー・スィネータ村の醜聞』（創文社、1997）や、長谷川まゆ帆氏の

『お産椅子への旅』（岩波書店、2004）は、「私」と学問との関係を意識的に問うている著作のように私は感じたのですが、自称問題とあわせて、今後考えてみたいテーマです。

3. 比喩

次に、二宮氏の文章における比喩の問題について考えてみましょう。二宮氏の用いる比喩としてまず思い浮かぶのが「生きた身体」であることは、異論のないところでしょう。例えば、下記のリュシアン・フェーヴルの「身体」の比喩は、この場にいるすべての方がご覧になったことがあるのではないのでしょうか――。

近代特有の学問の専門分化に伴って、歴史学も、政治史とか経済史とか文学史とか美術史とかに細分されてしまっているが、実をいえば歴史学の対象は「生きた人間たち」そのものなのだ。この人間を便宜上身体のある部分、たとえば頭ではなしに腕や脚でつかまえても、それは一向に構わないが、どこをつかまえようと、それを引っれば結局のところ人間全体を引っばることになるのだということを忘れぬようにしよう。ばらばらにしてしまえば人間は死んでしまう。歴史家はそんな死骸の断片などに用はない。

この一節は、『二宮宏之著作集』のなかに、4 回も登場します（「全体を見る眼と歴史家たち」1976、1-3；「歴史的思考とその位相」1977、1-25；「現代歴史学生誕のドラマ」1995、5-4；『マルク・ブロックを読む』2005、5-166）。そのほか、次のような言い方もあります。

・（ブローデル『地中海』の）第一の狙いは、地中海世界なるものを、あたかも一人の歴史上の人物であるかのように、その息づかいまでも、まるごと描いて見せようとするところにある（「明確な物語性をもつ『地中海』の魅力」1992、1-227）。

・（「大恐怖」についてのルフェーヴルの言）「（集団の）メンバーの間に、こころの、そして恐らくはからだの、相互作用が生ずる。その相互作用が

人びとの神経を過度に昂ぶらせ、不安をその頂点にまで高める。こうして彼らは、不安から逃れるために、行動へと急ぐのだ。つまりは、前へ逃げるのである」と。行動に至る心性の動きが、身体に密着した形で語られているのを、そこに見ることができる（「社会史における『集合心性』」1979、2-114）。

二宮氏の著作のなかでの「身体」の比喩を通観してみますと、二つの側面が見て取れるように思います。一つは、部分（ばらばら）でなく全体、という含意です。そこには、ブロックないし戦後歴史学の「構造」論を受け継ぐ方向性ととともに、それが完結した全体像として成立するやいなや、「問題発見的機能を失い重苦しい桎梏」となってしまうことへの危惧が見られます（「社会史の課題と方法」1980、1-315；『全体を見る眼と歴史家たち』あとがき、1986、1-408, et passim）。もう一つは、「頭でっかち」でない身体的側面への着目です。生物学的与件であると同時に社会状態の反映でもある身体。人口、セクシュアリテ、身体技法、労働、食生活、病気、衛生、自然、風土などの問題群がそれと関わります（「参照系としてののからだところ」1988、3-8, et passim）。二宮史学におけるこの「二つの身体」は、重なりあうのでしょうか。「生きている」身体とは何なののでしょうか。

この「身体」の比喩との関係で、二宮氏の「構造」概念についても、少し考えてみたいと思います。2006年の大変興味深い鼎談（成田龍一、安丸良夫、山之内靖）において、安丸氏は成田氏に次のように質問しておられます――。

安丸「二宮さんはやはり構造的全体史だと思うんですよ。その点は成田さんはどうお考えになるのか。」成田「……二宮さんは最後まで全体史は手放されなかった。しかし、構造と言ったときには、それが、がちとしたハードなものではなく、絶えず揺さぶられ変形するものとして考えられており、さらに『歴史学再考』以後では、そもそも構造的な全体史を語るとはどのようなことなのか、

というあらたな論点を組み入れていると思うのですね」（「歴史家・二宮宏之を語る」2006、*Quadrante*, No.9、2007、20頁）。

私自身は、そもそもが二宮氏の「フランス絶対王政の統治構造」（日本西洋史学会での報告は1977年、論文としての刊行は1979年）に魅せられて二宮氏のお名前を知ったという経験をもつものですから、二宮氏が「構造的全体史」であることに異論はないし、むしろそこに二宮史学の魅力があると感じています。ただ「構造とは何か」と言った時に、「フランス絶対王政の統治構造」には、それ以前とは少し異なる「構造」概念が見られるように思います。

この論文では、一元的・絶対的支配という当時のイデオロギーに対置する形で社团的構造のモデルが描かれているので、社团的モデルが、イデオロギーのベールをはぎとった後の「客観的」な構造モデルとして提出されているかのように捉えられやすいのです。しかし私見では（何分門外漢なのでピントがはずれているかもしれませんが）、このモデルの説得性は、「客観的」というよりもむしろ、当時の人々の社会的構造感覚（sense of social structure）により密着したものであることに由来すると思われます。「ハードな」というよりは、「間主観的な」構造です。社団＝身体（corps）という中心概念を始めとして、「侮蔑の滝」の比喩など、この論文は、当時の人々の社会感覚に丁寧によりそいつつ書かれている。そこに私は非常に感銘を受けたのです。

注目すべきは、ほぼ同じ時期に、日本史でも中国史でも、客観主義的な構造論から社会的構造感覚にねがず構造論への転換が起こっていることです。日本史では尾藤正英氏の「江戸時代の社会と政治思想の特質」（1981）における、いわゆる「役の体系」論がそれに当るでしょう。中国史では、上田信氏が森正夫氏、高橋芳郎氏などの研究に言及しつつ、80年前後の動向を大略以下のようにまとめているので引いておきましょう――階級闘

争・発展段階論に代わり、現代を相対化し批判する方法・視座を探るという課題のもとで、対象となる社会・文化そのものに価値を認め、それに個有な内的世界＝構造を解明することが要請される。構造的把握の方法として次の三点を挙げることができる。①共時的事象を重視し、その相互連関を明らかにする。②共時的事象を秩序づけているものを明らかにする。たとえば、人間の行動を無意識の中に規定する規範意識・慣習・世界観、経済行動・思想を規定する市場構造、法を支える理念、支配者と被支配者、反乱主体と鎮圧者の双方を同時に規定する観念など。③時間あるいは空間をもって隔てられる二つ以上の構造の変化、各構造の特徴を解明する（『史学雑誌 1982 年の歴史学界回顧と展望』明清、193－197 頁）。

二宮氏の「フランス絶対王政の統治構造」は、日本の歴史学界におけるこのような「構造概念の構造転換」を先導したものとして史学史のなかに位置づけることができるのではないのでしょうか。地域と時代を問わず、人々は自分を取り巻く世界の全体像を何らかの形で「感じて」いたものと思われる。知識人のみならず、「カトリーヌやジャック」のような人々もその点では同様でしょう。「頭でっかち」な理屈としての理解でなく、「感じられた」世界。歴史学は、そうした「感じ」をどのようにとらえ、読者に伝えることが出来るのか。二宮氏は、社会の「全体」と、人々の「感覚」とを包摂する歴史像を描こうとしました。その結節点にあったのが「生きている身体」のイメージであったと思われます。「全体」であるとともに、それが冷たい建造物のような「枠」でなく一人一人の内面的感覚に根差すものである、そのような「構造」を二宮氏は追求されようとしたのだと思います。むしろ、そうした構造論については、認識論的な省察も必要です。しかし、哲学者の皆さんには、それが「物語り」であることと同時に、その「物語り」がどうしてこんなにも切実に私たちの心を捉えるのかを教えていただければ有り難いで

す。

以上、未熟な走り書きではありますが、思うところを述べました。素人ゆえの誤解も多々あるかと思いますが、ご叱正をいただければ幸いです。

＊報告後、多くの方々から様々のご教示をいただきました。特に安村直己氏からは「自称」問題について、貴重なご指教を頂戴しました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

（きしもと みお・お茶の水女子大学）